



平成15年度
高松宮妃癌研究基金学術賞等
贈呈式

平成16年2月23日

財団法人 高松宮妃癌研究基金



名誉総裁 高松宮妃殿下



総裁 寛仁親王殿下

❁ 妃殿下のおことば ❁

私は昭和8年母を癌で亡くした時以来その悲しみの深さからこの恐ろしい病気に
並々ならぬ関心をもつようになりました。

それ以来人類最大の問題である癌という病気撲滅の為にその研究の助成をつ
づけて今日に至りました。

この度多くの方々の支持を得て高松宮妃癌研究基金の設立の運びとなりました
ことは私のこの上ない喜びであります。今後は広く社会一般の皆様の御協力を仰ぎ
癌撲滅の為に一層の力をつくしたいと思います。

(昭和43年4月20日 財団法人高松宮妃癌研究基金 設立にあたり)

当財団の沿革

高松宮妃殿下には、昭和8年母君を癌でなくされてより、癌撲滅を強く念願され、当時貴重であったラジウム30ミリグラムをわが国唯一の癌研究機関であった財団法人癌研究会に寄贈された。

また昭和28年には、女子学習院の同級生と「なでしこ会」を組織してご自身会長となられ、度重なる慈善公演会やバザーを開催して、その純益金を未だ戦災からの復興途上にあつた癌研究会癌研究所を主体に寄贈され、戦後におけるわが国癌研究の推進に大きな貢献を果たされた。

やがて上記の様々なチャリティーによって得た、なでしこ会の積立金が2千900万円に達したので、昭和43年4月20日、文部省の設立許可を得て、2千万円を基本財産とする財団法人高松宮妃癌研究基金が発足するに至った。

平成13年2月7日、名誉総裁高松宮妃殿下の思召しにより寛仁親王殿下が総裁に就任された。

主要事業

1. 高松宮妃癌研究基金学術賞の贈呈

癌に関する研究で特に顕著な業績を挙げた研究者に対して学術賞を贈呈する。

2. 研究助成金の贈呈

癌研究の進歩、発展に貢献することが大きいと考えられる研究を行っている研究者またはそのグループに対して研究助成金を贈呈する。

3. 国際シンポジウムの開催

世界の癌研究の先端を担う権威ある科学者を国の内外から招聘し、研究討議する。終了後その発表要旨(英文)を出版する。

4. 国際講演会の開催

海外の著名な癌学者を招聘し、国内各地で講演会を開催する。

5. 研究者の海外関係機関への派遣

適格な研究者を海外の研究機関や学術会議に派遣する。

6. 中原記念シニア・フェローシップの贈呈

定年後の有為な癌研究者に対し研究継続のフェローシップを贈呈する。

7. 東及び東南アジア諸国との国際がん研究招聘プログラム

当該諸国の癌研究者を招聘し、国内研究機関で育成研修を行う。

8. 国際ワークショップの開催

少数精鋭の国内外の専門家による重点的かつ詳細な研究討議を行う。

9. 機関誌「CANCER」の発刊

当財団の事業内容や癌治療の最前線などの情報を広く伝えるため年1回機関誌を発刊する。

財団法人 高松宮妃癌研究基金

平成15年度学術賞等贈呈式次第

開 式

理事長 あいさつ 末 舛 惠 一

学術委員長 報告 杉 村 隆

学術賞贈呈

審良 静男 殿 大阪大学微生物病研究所癌抑制遺伝子研究分野教授

金子 明博 殿 国立がんセンター中央病院眼科医長

研究助成金贈呈

江角 浩安 殿 国立がんセンター研究所支所長

久保 肇 殿 京都大学大学院医学研究科特任助教授

瀬戸 加大 殿 愛知県がんセンター研究所遺伝子医療研究部部長

高岡 晃教 殿 東京大学大学院医学系研究科免疫学講座講師

西村 孝司 殿 北海道大学遺伝子病制御研究所教授

畠山 昌則 殿 北海道大学遺伝子病制御研究所教授

羽瀧 友則 殿 秋田大学医学部生殖発達医学講座教授

山下 聡 殿 国立がんセンター研究所発がん研究部研究員

山本 博幸 殿 札幌医科大学内科学第一講座助手

矢守 隆夫 殿 財団法人癌研究会癌化学療法センター分子薬理部部長

研究者海外出張助成金贈呈

今村 健志 殿 財団法人癌研究会癌研究所生化学部主任研究員

佐々木 泰史 殿 札幌医科大学医学部助手

戸塚 ゆ加里 殿 国立がんセンター研究所研究員

総裁 寛仁親王殿下 おことば

学術賞受賞者謝辞 金子 明博 殿

研究助成金受領者謝辞 江角 浩安 殿

閉 式

(式終了後レセプション開催)

平成15年度学術賞受賞者

金子 明博 博士

国立がんセンター中央病院
眼科 医長

研究業績 眼部悪性腫瘍の眼球保存療法に関する研究
Eye-preservation Therapy for Ophthalmic
Malignant Tumors



金子明博博士のプロフィール

医師を志した人の多くに、幼少期の生物好き、生物体験があります。金子明博博士もまた、生物学好きが高じて医学部に進みました。東京大学医学部に入学し、卒業当時、インターン制度をめぐる学生運動が盛んでした。金子博士は、遙か群集を離れて、インターン制度の存続改善の考えに立ち、虎ノ門病院で単独研修を受けています。周囲の状況に流されない、独自の視点、行動は、この頃から認められたようです。その当時、眼科は学生に人気がなく、東大眼科から、虎ノ門病院へパートで来ていた先生に、眼科なら入局後すぐ有給助手になれる、と聞かされ、1966年、東大眼科学教室に入局し、文部教官に採用されました。

そのような経過と本来の志向から、金子博士は何となく一般眼科が物足りなくて、眼科では特殊な領域で、医局にも専門家のいない眼部腫瘍に興味を覚えました。特に乳幼児の網膜から発生する悪性腫瘍である網膜芽細胞腫の初期症状に白色瞳孔があり、その鑑別診断が困難でした。多くの眼科医が、時に指導教官であっても「疑わしきは罰する」という方針で眼球摘出を行ない、結果的に不用な手術であった場合も何度か経験しました。こうした臨床実態を目の当たりにして、金子博士は「何とかならないものか」と種々の探求を続け、わが国における眼科超音波診断の先駆けの一人となりました。

臨床家の研究は臨床に直結する必要があるという強い信念に基づき、その後も金子博士は独自に眼部腫瘍の研究に取り組み、1973年から、より豊富な臨床経験を求めて国立がんセンター病院（現・国立がんセンター中央病院）に赴任しています。こうして当時の眼科医長の桐淵光智先生の指導を受けて、眼科腫瘍医として育っていったのです。桐淵医長が新設の琉球大学教授として栄転された後を受けて、眼科医長となり、眼部腫瘍の診断と治療に邁進しました。とりわけ、乳幼児の網膜芽細胞腫に対する眼球温存療法の確立を求めて、32年間勤務してきました。一つの目標に向ってまっしぐらに進み続けたこのプロフィールは、金子博士の特徴を遺憾なく伝えていると思います。（文責：垣添忠生）

「眼部悪性腫瘍の眼球保存療法に関する研究」の業績のあらまし

眼部悪性腫瘍は頻度が少ない疾患ですが、金子博士は、その死亡に関する実態を解明するため、UICCによる五大大陸の悪性腫瘍による死亡統計を使用して分析し、眼部に関して資料の得られた17カ国について比較すると、いずれも乳児期と高齢期にピークのある二峰性曲線となることを明らかにし、我が国は高齢期の死亡率が著しく低いことを発見しました。その原因を知るために、どの程度の発生頻度であるかにつき全国調査を精力的に行いました。頻度が少ないため、全国の眼科医の協力も得られやすいこともあり、90%以上の回答率で眼部メラノーマ、網膜芽細胞腫、涙腺癌につき明らかにする事が出来ました。これにより、眼部メラノーマの発生頻度は欧米では日本の25～30倍あることが判明しました。

眼部は重要な感覚である視機能を司る器官であるほかに、容貌の中心でもあり、そこに悪性腫瘍が発生しても、生命の維持は勿論ですが、良好なQOL維持のためには視機能や形態の温存が望ましく、これまでは患部を大きく切除すれば生存率の向上に貢献すると考えられてきましたが、他の多くの臓器と同様、眼部においては特に早期に発見されやすい事もあり、必ずしも正しくないことが明らかになりつつあります。金子博士は網膜芽細胞腫、脈絡膜メラノーマと結膜メラノーマについて、眼球摘出や眼窩内容除去術を行わずに眼球保存治療を行っても長期生存率が悪くならないことを明らかにして、眼球保存治療の発展と普及に貢献し、多くの患者のQOLの向上に役立って来た事は間違いのない事実であります。

その他、網膜芽細胞腫の眼球保存療法の治療成績向上のため、厚生省がん研究助成金の研究班長として、臨床的観点から開発が必要な方向を明らかにし、有能な共同研究者の協力を得て、melphalanの有用性の発見、全身的な副作用の少ない化学療法のためのバルーンカテーテルを使用する選択的眼動脈注入法の開発、これまで特に難治だった硝子体播種に対する、32G針によるmelphalanの硝子体内注入法の開発などにより治療成績は格段と向上し、近年では全国の70%以上の症例が毎年、国立がんセンター中央病院眼科を受診する状況となっています。

(文責:海老原 敏)

金子明博博士の略歴

- 1966年 東京大学医学部医学科卒業
虎ノ門病院で医師実地修練
- 1967年 東京大学附属病院眼科助手
- 1973年 国立がんセンター病院(現・国立がんセンター中央病院)眼科医長心得
- 1976年 東京大学より『網膜芽細胞腫の診断と疫学』に対し医学博士号
国立がんセンター病院(現・国立がんセンター中央病院)眼科医長
現在に至る

財団法人高松宮妃癌研究基金

学術委員会委員名簿

(任期:平成14年4月1日~平成16年3月31日)

委員長

杉 村 隆 国立がんセンター名誉総長

委員

伊 東 信 行 名古屋市立大学名誉教授、前学長

海老原 敏 国立がんセンター東病院名誉院長

岸 本 忠 三 内閣府総合科学技術会議議員

菅 野 晴 夫 (財)癌研究会名誉研究所長

富 永 祐 民 (財)愛知県健康づくり振興事業団副理事長

豊 島 久真男 理化学研究所遺伝子多型研究センター長

西 村 暹 萬有製薬(株)つくば研究所名誉所長

谷 内 昭 札幌医科大学名誉教授、前学長

(計 9名)

(敬称略、五十音順)